



TITLE:

ディルタイ哲學と經濟哲學(一)

AUTHOR(S):

石川, 興二

---

CITATION:

石川, 興二. ディルタイ哲學と經濟哲學(一). 經濟論叢 1931, 32(4): 612-632

ISSUE DATE:

1931-04-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130020>

RIGHT:

# 東京帝國大學經濟學會 經濟論叢

第四號

第三十二卷

昭和六年四月一日發行

## 論 叢

地方人税の課税方法 . . . . . 法學博士 神戸 正雄  
ディルタイ哲學と經濟哲學 . . . . . 經濟學博士 石川 興二  
數學的經濟學の論理的構造の批判 . . . . . 文學博士 米田庄太郎  
利子の形成について . . . . . 文學博士 高田 保馬

## 說 苑

米の生産と消費の分離 . . . . . 經濟學士 谷口 吉彦  
農業恐慌 . . . . . 經濟學士 八木芳之助  
獨逸中工業金融機關としてIndustrieschaft . . . . . 經濟學士 楠見 一正

## 雜 錄

測るべき大量 . . . . . 經濟學士 蜷川 虎三  
生計費指數に就て . . . . . 經濟學士 益田 熊雄  
百姓一揆論に關し土屋喬雄氏に答ふ . . . . . 經濟學博士 黒 正 巖

## 附 錄

新着外國經濟雜誌主要論題

## デイルタイ哲學と經濟哲學（二）

石 川 興 二

今日まで經濟哲學は多く「學の哲學」の立場に於て考へられたのであるが、私はこれを「生の哲學」の立場に於て考へたいと思ふのである。而してリッケルトは「學の哲學」の中心をなせるに對しデイルタイは現代の「生の哲學」の中心をなせるが故に<sup>1)</sup>、私は先づ經濟哲學をデイルタイ哲學との關係に於て考へんとするのである。このことによつて、「生の哲學」の立場に於て初めて經濟哲學が確立せらるべきものであり、またデイルタイが「精神科學の認識論の創造者」とせらるゝ所以も明にさるであらう。

經濟哲學の研究に當つては第一に經濟哲學なる概念が明にせられることを要するのであるが、此が爲には先づ哲學なる概念が明にされねばならぬ。然るに此概念は未だ十分明にされて居ないのであつて、其主たる原因の一は、經濟なる概念に於けると同様に、此を明にする方法が確立せざるによるのである。然るにデイルタイは優れたる方法をもつて生の哲學の立場より此を明確にして居るのである。而してまた或人が哲學なるものを何と考へて居るかを知らなくては、其人の哲

1) 拙著「精神科學的經濟學の基礎問題」第一六頁以下參照

學を理解する鍵となるのである。斯くて茲に先づデイルタイに於て哲學の概念を明にし、此に即して經濟哲學の概念を明にせんことは、デイルタイ哲學研究の出發點としてもまた生の哲學の立場に於ける經濟哲學研究の出發點としても必要なることであらう。

デイルタイは『哲學の本質』<sup>1)</sup>に於て優れたる學的方法を以て哲學なる概念を明にせんとした。而して彼は此方法は凡て精神諸科學の主語概念を明にする爲めの方法であるとするのであるが、此方法自體の意義の詳しき考察は、此を經濟學の主語概念たる「經濟」の決定の場合に譲り、茲には哲學の概念を明にするに必要な程度に止めることとする。

即ちデイルタイの哲學の概念の決定方法は二段より成つて居る。第一は彼が「哲學の本質の決定の爲めの歴史的方法」<sup>2)</sup>と云へるものであり、第二は「精神界に於ける位置から理解 Verstehen されたる哲學の本質」<sup>3)</sup>と云へるものである。前者に於て彼は歷史上に於ける哲學の事實より哲學の本質的諸特徴を求め、後者に於ては哲學を個人的並に社會的生に於ける機能として把握した。

此哲學の概念構成の方法の意義は此を彼の哲學の根本概念であるところの *Leben, Ausdruck, Verstehen* (生、表現、理解) の關係よりその骨子を明にすることが出来る。即ち哲學なる事實は精神的所産であり即ち社會的並に個人的生の表現である。従つて此事實に於て求められたる哲學

1) "Das Wesen der Philosophie." (Dilheys Gesammelte Schriften. Bd. V. S. 339以下)

2) G. S. Bd. V. S. 345.

3) Ebenda. S. 371.

の本質的諸特徵より、かゝる本質的諸特徵を有する事實を其表現とするところの哲學機能を生の中に求め、此哲學機能に於て諸特徵を統括し理解するのである。然る後かくて知られたる哲學的諸機能の普遍的性質として、從つて哲學の最も普遍的なる機能として哲學の統一的本質的概念 *das einheitliche Wesen der Philosophie* が明にされるのである。

扱て此歴史的方法是哲學的事實を前提とする。然るに哲學的事實なることの規定は哲學の何なるかを前提とする。此概念構成に於ける避く可らざる循環より來る不確實性は、人々が何が哲學なるかを考へる時即ち人々が哲學なる一般的表象 *Allgemeinvorstellung* を作る時に、頼りとするところの代表的諸哲學體系より出發し、前述せしが如き仕方にて次第に確實なる方法に進むことに依つて打勝ち得ると彼は考へたのである。かくて先づ彼はかくの如き代表的諸體系について普遍的なる事態を確定せんとし二つの共通的な形式的特徵を確めた。其一は全般性の特性 (*Charakter der Universalität*) であつて聯關付 *Zusammenfassung* の努力がこれに相當する。其二は普遍的妥當的智識の要求 (*Forderung allgemeingültigen Wissens*) であつて根據付 *Begründung* に於て最後の點に至る迄溯つて行く努力がこれに相當するのである。更に此等の諸體系には或輪廓に於て内容的關聯が見られたのである。

斯くて明にされたる共通的特徵に於て思惟は如何なる範圍に於て他の諸體系も亦哲學の領域に

屬するかを定むる標準を得たのであるが、此標準によつて哲學の領域に屬することが明にされたる諸哲學體系は歴史的聯關を成せるものなるが故にデイルタイは次に此歴史的聯關より更に哲學の諸特徴を吟味し補はんとした。斯くて彼はギリシヤに始まり二十世紀に至る哲學の諸體系を歴史的聯關に於て考察した。而してそこに全般性への、而して根據付への同じ傾向 *dieselbe Tendenz zur Universalität, zur Begründung* を見たのである。

斯く哲學史上の諸事實より哲學の本質的諸特徴を歸納的に誘き出したるデイルタイは今や「かくて得られたる哲學の諸本質特徴の個人並に社會の構造聯關に於ける位置を究め、哲學を個人並に社會に於ける生き生きとした機能 (*eine lebendige Funktion*) として把握」<sup>1)</sup> せんとしたのであるが、彼はこのことを心的生命の構造聯關 (*Strukturzusammenhang des Seelenlebens*) の實踐性を基礎として爲して居るのである。

即ち心的生命の構造聯關の基礎形式は總ての心的生命が環境によつて制約されて居り而して此環境へ合目的に働き返へすといふことによつて規定されてゐるのである。即ち人間的生命は絶へず對象把握 (*Gegenständliches Auffassen*) より把握されたものの價值評定 (*Werthschätzung*) へ而して此價值評定より此に導かれて目的定立並規範附與 (*Zwecksetzung und Regelgebung*) へと進み以て實在に働きかけるのである。かく此三種の態度の仕方 *Verhaltensweise* に於て成立つ三種

1) G. S. Bd. V. S. 345.  
2) Ebenda. 372.

の智識即ち實在の智識、價値の智識、目的並に規範の智識に基いて生を實現するのである。それ故に人間的生命は自己の生の實現を一層確實にせんが爲めに絶へず此等三種の態度の仕方を見出し各々の智識を普遍妥當的智識の方向へ高め、更に此等三域の內的聯關を客觀的妥當的智識に於て把へやうと努める。即ち茲に個人の生の中に於て、智識を根據付け聯關付け以て生を高めんとする哲學的機能が見られる。斯くて「哲學なるものは人間の構造の中に備はつてゐる」<sup>1)</sup>のである。

斯くデイルタイは哲學の機能を究極に於て人間的生命の實踐的構造に基礎付けて居るのであるが、此ことは「生の哲學」にとつて重要な意義を有する。即ちかくて哲學なるものは同じく人間的生命の實踐的構造に基くところの經濟學其他の精神科學を直接に基礎付け得るところのものとなり、更にそれ自ら生を支配する力となるのである。此ことは以下更に詳にされるであらう。

諸個人に於ける此一様な構造より哲學的文化體系と呼ばれる目的聯關が成立する。次に此ものについて、社會的生に於ける哲學の機能が明にされねばならぬ。

デイルタイは哲學的文化體系の考察に於て、先づ其他の文化體系より、藝術、宗教、哲學の文化體系を區別し其共通性を以て結局限定されたる目的に基きこめられることのないと云ふことに基くとして居る。而も更に意志的態度の別より宗教、哲學を藝術より區別して居る。即ち詩は限定されたる目的決定のみならず意志的態度自體を排除する。此に對して宗教と哲學との恐のべき

1) G. S. Bd. V. S. 372.

眞面目さは我々の心の構造に於ける實在把握より目的定立に至る内面的聯關をそれが深みに於て把握し而して此深みより生命を形成せん (das Leben gestalten) とするところに存する。斯く内的に結ばれて生を形成すると云ふ同じ志向を有するが故に兩者は生存の爲めに戦はねばならぬのである。兩者に於て心情の深遠なる意味と概念的思惟の普遍妥當性とが互に相争ふのであると述べて居る。

即ち個人的生に於ける哲學的機能の特色と同じく社會的生に於ける哲學的機能の特色は概念の普遍妥當性に基いて生を全般的に支配形成するにあるのである。而してこのことは、以下考察せらるべき社會的生に於ける哲學の二面の機能たる哲學的人生觀に於てもまた諸文化域の哲學に於ても同様なのである。而して哲學の機能をかく把握するところに生の哲學者としての彼の立場がよく現はれて居るのである。

彼は哲學的文化體系に於ける哲學的機能として先づ哲學的世界觀を見てゐる。而もこゝに注意すべきことは今日の經濟學にとつて世界觀の問題が、マルクスの唯物史觀によつて、特に重要な意義を有するに至り、従つてまた世界觀の論を以て彼の哲學の重要な課題とせしデイルタイの世界觀論が、今日の經濟哲學にとつて密接なる關係を有することである。「諸々の命題の間に存するが如き根據付け (Begründung) の關係は、實在認識 (Wirklichkeitserkenntnis) に對して明證



の確固たる基準を要求する。諸價値の領域 (Region der Werte) に於ては正にこのことにより客觀的價値の假定へのみならず絶體的價値 (ein unbedingtes Wert) の要求への思惟の進行が成立つ。而して同様にして我々の意志行爲の域 (Gebiete unserer Willenshandlung) に於ては思惟は最高善又は最高規範 (ein höchstes Gut oder eine oberste Regel) に到達する時初めて休止する。生を成す諸契機は斯く概念の普遍化及び命題の一般化に依つてそれぞれ體系を成す。體系的思惟の形式としての根據付は此體系の各に於て概念的構成分子を益々明晰に益々完全に連絡する。而して此等諸體系が到達するところの最高の諸概念即ち普遍的存在究極の根源、絶體的價値、最高善は目的的聯關の概念に於て包括される<sup>1)</sup>。而して斯く「世界觀が概念的に把握せられ根據付けられ而して普遍妥當性に高められる時我々はそれを形而上學 (Metaphysik) と名づけるのである<sup>2)</sup>」。即ちデイルタイは哲學的世界觀即ち形而上學を以て、心的構造の三つの態度の仕方<sup>3)</sup>に於て成立つ三種の經驗を哲學的態度であるところの聯關付 (Zusammenfassung) 及び根據付 (Begründung) によつて客觀的對象的統一へまで總括する機能として考察して居る。而して此世界觀が人生を支配せんとする強き力であることは前述せし如くである。

デイルタイは世界觀の型を考察し此を三種に分つてゐる。即ち世界觀には三つの型があるのであるが、それは世界觀が心的生命の構造に於ける三つの態度の仕方 (Verhaltensweise) によつて

1) G. S. Bd. V. S.S. 400—I.

2) Ebenda. S. 401.

決定されることによつて生ずるのである。即ち世界觀が對象把握の態度によつて決定される時にはこのものに於ては因果の概念が支配する。此概念が經驗を一面的に規定するならば價值及目的の概念の入る餘地はなくなるのである。而して此世界解釋は物的世界よりの精神的世界の解釋と云ふ形をとる。かくて自然主義、唯物主義、實證主義が成立つとして居る。マルクスの唯物史觀の性質は此に近きものとして考へ得られるであらう。次に世界觀が感情生活の態度によつて決定される時には價值の概念が支配し全實在は內的なるものの表現として現はれ、「客觀的理想主義」が成立つ、例へばヘーゲルの世界觀はこれである。最後に意志的態度によつて世界觀が決定される時には目的の概念が支配し、「自由の理想主義」が成立つ。

デイルタイは哲學的世界觀即ち形而上學の課題を以て不可能なりとするのである。即ち哲學的世界觀即ち形而上學は心的構造に於ける三種の態度の仕方に基く經驗が客觀的對象的統一 (eine objektive gegenständliche Einheit) に總括されることを要求する。然し主觀は此等態度の仕方のいづれかに於て従つて此等の態度の仕方より生ずる存在、原因、價值、目的なる基本範疇の中の或一つに従つて世界に對し得るのみであり従つて我々が世界に對する關係の或る一面を知り得るに過ぎないのであつて、此等總ての範疇の聯關によつて規定されるような全體の關係はこれを客觀的妥當的に知り得ないのである。これ形而上學が不可能なる第一理由であるとするのである。更

に形而上學は此等の態度の仕方各に於て終局原因、無制約的價值、無制約的目的を客觀的妥當的に求めるのであるが、このことがまた不可能であるとする。而も尙ほ彼は世界觀に積極的な價值を認め而して世界觀に關する哲學を認めるのである。即ち哲學は一つの形而上學的體系によつて世界をそれが本質に於て把握し得ず、また此認識を客觀的妥當的に證明することを得ない。然しながら恰も眞面目なる詩に於て、嘗て見られなかつた人生の一つの相が露出され、斯くて詩の全體に於て我々は人生の全體的な相に近づき得るが如くに、典型的な世界觀の各々の中には世界人生の一つの眞相が啓示されて居り、此等の世界觀の歴史的過程を方法的に分析するところの世界觀論に於ては世界人生の量り知れぬ深さが經驗されるのである。斯くて世界觀に關するデイルタイの哲學は此世界觀論 (Weltanschauungslehre) として成立つのである。而して本年公刊された全集第八卷<sup>1)</sup>はこれに相當するものであるが故に、デイルタイの世界觀論とその經濟哲學に對する關係の詳細は此に於て初めて明にされ得るのである。

斯くの如きデイルタイの立場よりしてマルクスの唯物史觀又は經濟史觀なるものについても次の如くに云ふことが出来るであらう。即ち經濟史觀なるものはそれ自身としては哲學たることを得ないが、然しそれは經濟生活の經驗を中心とするところの人生觀であつて未だ十分に知られなかつた人生の一眞相を經濟生活の方面より露出せしものである。斯くして經濟的人生觀を中心と

1) G. S. Bd. VIII. „Weltanschauungslehre.“

して人生觀を方法的に研究することを以て哲學の一部としての經濟哲學の課題であるとする事が出来るであらう。

以上の哲學的世界觀はデイルタイが哲學的文化域に於て見たる哲學的機能の一面であるが、彼は更に他の一面を見て居る。諸文化域に關する哲學が即ちそれである。即ち諸文化域に於ては茲に於て出來上つた思惟を繼續するところの哲學的機能が出來た。斯くて各文化域に於ける専門的思惟は絶へざる完成に於て哲學的思惟に移り行くのである。而してそれは最高の段階に於ては「智識の一般論」又は「智識の理論」となる。

即ち「世界觀に於ては諸々の態度の仕方 (Verhaltensweise) に基く經驗が客觀的對象の統一に總括されるのである。此態度の仕方自體がその内容との關係に於て意識に高められ其等の仕方に於て成立する經驗が研究され此經驗の妥當性が吟味されるならば茲に哲學的自覺の他の面が現はれる。此側から見られるならば哲學は、妥當的智識を生産する目的によつて規定されて居るところの總べての思惟過程の形式、規範及び聯關をそれが對象とするところの基礎學 (Grundwissenschaft) である。この基礎學は論理學としては、正しく遂行される思惟過程に結び付いて居るところの明證なるものの諸條件を研究し然もそれに於て思惟過程の現はれる何れの域に於ても研究する。基礎學は認識論としては、體驗の眞實性の意識より而して外的感覺の客觀的所與性の意識

より我々の認識の此等の前提の權利根據へ遡る。斯くの如き智識の理論 (Theorie des Wissens) としてそれは學である。<sup>1)</sup>かくてここに「智識の理論」と云はるるところのものは一般的論理學でありまた一般的認識論であつて哲學の機能として最高最終の段階を爲すところのものである。

此哲學の機能を基礎として哲學が諸文化域との關係に入ることによつて、ここに「個々の文化域に關する理論」としての哲學の機能が存するのである。而してデイルタイは茲に社會に於ける諸文化域を心的構造の聯關に卽して三分しその各々との關係に於て此哲學の機能を考察してゐる。

先づ實在認識の域に於て哲學は實在認識を目的とする特殊諸科學との關係に入る。而して一般論理學の助をかりて此等特殊諸科學の態度の仕方を解明し、一般認識論の助をかりて特殊諸科學的認識の諸前提、目標、限界を研究する。斯くて得られたる結果は實在認識を目的とする特殊諸科學に適用されこれを根據付け (Begründen) 聯關付ける (Zusammenfassen) のである。

次に價值評定の域に於て哲學は生活經驗との關係に入る。生活經驗とは其に於て我々が生命價值及物の價值を吟味する諸過程である。個人に於ける生活經驗は社會の生活經驗へまで自己を擴大する。社會が其諸の働に於て爲す生活經驗は諸々の生活價值の益々適切なる諸規定を得輿論によつて此等諸價值に確實な規制されたる位置を與へ此によつて社會は一つの價值段階 Wertabstufung

1) G. S. Bd. V. S. 408.

lungを生産し、此價值段階は個々人を制約する。今や此社會の基礎の上に個人の生活經驗は現はれ来る、而して我々は此等の生活經驗を歴史によりまた詩によりて補ふ。斯くて生活經驗は發展して行く。

此人生々活に於ける生活經驗なるものは初めは方法的でないが、其の仕方の効果と限界とを覺ることによつて、價值決定の主觀的性質を克服すべく努力するところの方法的自覺 methodische Besinnung にまじ高められねばならない。斯くて生活經驗は哲學へ移り行く。此生活經驗の純化及び根據付けが諸哲學體系に於ける本質的な成素を形成して居るのである。斯くて哲學に於て內在的諸生活價值の體系並に對象的作用價值の體系 das System der immanenten Lebenswerte und das der gegenständlichen Wirkungswerte<sup>1)</sup> が成立する。

最後に哲學は實踐界との關係に於ては、意志の諸規範、諸目的、諸善に關する自覺である。即ち哲學は茲に於ては論理學的には此等の智識の成立する意志的態度なるものの本質を明にし、また認識論的には此等の智識の可能なる諸條件を明にし、而して斯くて得られたる論理的並に認識論的基礎に基いて諸規範、諸目的、諸善の智識を根據付け關聯付けるのである。かくて「哲學は人間の向上と人間の諸生活秩序の發展へ突き進むところの内的力<sup>2)</sup>」となる。

即ち彼は茲に於ても哲學を以て生に於ける智識を關聯つけ根據つけ生を支配するものとして考

1) G. S. Bd. V. 410

2) Ebenda. S. 411.

へて居るのである。

以上に於て哲學の諸機能が個人の生の中に於て又社會の生の中に於て明にされたのであつて、曩に歴史的方法に於て歸納的に知られたる哲學の本質的諸特徴は其中に統括されたのである。而して此等諸機能に於ける最も普遍的なる性質が知らるるならば、是哲學の統一的本質 *das einheitliche Wesen der Philosophie* である。

先づ哲學の總ての機能の中に存する最も一般的な性質は所與的なものを其最後の基礎にまで溯つて聯關付け、根據付けんとする思惟の特性である。斯く見られたる時哲學は「最も徹底せる最も力強き、最も抱括的な思惟」<sup>1)</sup>に外ならぬのである。此デイルタイの考へはこれをヘーゲルに於ける *Vermitteln* 媒介なる語に要約して考へてとが出来るであらう。即ち *Vermitteln* 媒介するとは所與的な *unmittelbar* 直接なものを其基礎より根據付け、同時に聯關付けることである。この意味に於て *Dialektisch* 辨證法的とも云ふことが出来るであらう。故にこれを擴げるならばデイルタイの所謂 *die Grundlegung, die Begründung und Zusammenfassung* <sup>2)</sup>と云ふことである。即ち先づ基礎を置き、此基礎に基いて根據付け聯關付けると云ふことである。而して此基礎の最後の支持點が對象たる實在の本質であることは後に明にせらるるが如くである。

次に諸機能に於て見られし哲學の普遍性は生の支配と云ふことであつた。即ち思惟なるものは

1) G. S. Bd. V. S. 414.  
2) Ebenda. S. 416.

本來生の實踐的構造の中に働いて居るものであり、これが其實踐を確實にせんが爲めに自らを徹底して哲學に高まつたのである。故にそれはまた必然に生を支配する力となるのである。

かくて明にされし哲學の統一的本質を約言せば、哲學は實在の本質を明にし、此を基礎として實在に關する智識を根據付け聯關付け、斯くて實在を支配する內的な力であると云ふことが出来るであらう。

此哲學の統一的本質よりデイルタイに於ける哲學史の本質も初めて明にされ得る。即ちデイルタイは哲學史上に於ける種々なる哲學體系は、此哲學の統一的本質が種々なる歴史的事情の制約の下に現はれたるものなるが故に、此本質より統一的に把握され得るとするのである。

而してデイルタイに於ける哲學の體系もまた此の哲學の統一的本質より理解し得るのである。

即ち彼の「諸文化域の哲學」は諸文化域に於ける諸智識を聯關付け *Zusammenfassung* 根據付け *Begründung* 基礎付ける *Grundlegung* ものであり而して生を變革せんとする力であり、而して彼の「智識の理論」と云へるところのものは更に此諸文化域の哲學を基礎付けるところのものである。更に彼が、形而上學自體を不可能なりとなし、而も世界觀論をもつて哲學なりとすることもまた哲學のこの統一的本質より理解し得るのである。即ち形而上學に於ても哲學は此普遍的本質よりして總ての經驗を聯關付け、根據付けんとしたのである。然しながらそれは不可能なることなり



しが故に形而上學は沒落せざるを得なかつたのである。而も「世界觀の哲學」なるものは哲學の此本質より諸の世界觀を聯關付け、根據付けることによつて成立するのである。斯くて哲學の體系は「智識の理論」並に「諸文化域の哲學」と「人生觀の哲學」とより成ることとなる。

## 二

生の哲學の立場に於ける經濟哲學の概念と體系とは、以上明にされたデイルタイの哲學の概念と體系とに即して考へ得らるるのである。而して經濟哲學とデイルタイの世界觀の哲學との關係は此を既に一應考察したるが故に、茲には主として經濟哲學を諸文化域の哲學との關係に於て考察して見よう。

既に明にせしが如く諸文化域の哲學の地盤は諸文化域に於ける生にあるのである。即ち文化の諸域に於ける専門的思惟は絶へざる完成に於て哲學的思惟に移り行くのであるが、このことは經濟的文化域に於ても亦同様である。即ち

人間の生命の本質的構造なるものは、既に述べしが如く、自然的並に文化的環境に制約せられ又此環境へ働きかけるのである。即ち我は對象把握をなし、此に基きて價值評定をなし、更に此に基きて目的定立、規範附與をなし、以て外界に働きかけ、以て生の創造性を實現するのである。従つて經濟的文化域に於て營む我の生に於ても對象把握の態度によつて經濟生活に關する實

在的智識が生じ、價值評定の態度によつて此に關する價值の智識が生じ、目的定立及規範附與の態度によつて此に關する目的の智識並に規範の智識が生ずる。而して此個人的生活經驗は社會的生の創造であるところの全般的生活經驗に結ぶ。此全般的生活經驗に於ては個人的諸觀點が相殺せられ、且つ歸納が其に基けられるところの場合の數が増大されると云ふ點に於て其確實性は個人的生活經驗に於けるよりも一層大となる。斯くて經濟生活は此に基くことによつて個人的生活經驗に基くよりもよりよく其目的を到達し得るのである。

而も此生活經驗に基いても尙ほ經濟生活は十分に自己の目的を到達し得ないのである。茲に於て思惟は更にこの生活經驗を方法的に、普遍妥當的認識に高めんとする。茲に經濟學なるものが成立つのである。斯くて諸種の經濟學は諸種の經濟的生活經驗より次第に成立し來るのである。即ち、生活經驗の中には、心的生命の構造聯關に於ける諸種の態度の仕方の相違に基いて實在、價值、目的、規範の諸種の智識が成立つ、従つて此より諸種の經濟學が成立する。即ち實在認識の普遍的智識を取扱ふ經濟理論、實在認識の個性的智識を取扱ふ經濟史論、經濟生活の價值、目的、規範の智識を取扱ふ經濟政策又は經濟實踐論がそれである。更に又生活經驗の中に於ける此等經濟的智識の主語は種々異なつて居つて、それは個人、家庭、經濟社會、國民經濟、國際經濟等である。かくて經濟學に於ても、その主語の相違によつて個人經濟學、家庭經濟學、社會經濟

學、國民經濟學、國際經濟學等の諸種の經濟學が生するのである。更にまた諸國民、諸時代、諸階級の生活經驗の相違より、諸種の學派の對立分裂が生ずる。例へば正統學派、社會學派、歴史學派等の分裂對立は即ちこれである。

かくて今日我々に與へられて居るところの經濟學なるものは多種なる經濟學であつて、而も其等經濟學の認識は十分客觀的妥當性に高められて居らず、其等經濟學の聯關は十分明にされて居らず、殊に正統學派、社會主義派、歴史派等の諸經濟學の對立抗爭は現代經濟學界に於ける顯著なる特色をなして居るのである。

斯くの如き現代經濟學界の事情の下に於てはデイルタイの所謂哲學的精神 *Der philosophische Geist* なるものが特に顯著に働かざるを得ないのである。即ちデイルタイは曰く「研究者が方法的意識を以て彼の科學をそれが究極の權利根據へまで溯らせ、又は幾つかの科學を結び合はせ根據付けるところの一般化へ突き進むところには、至るところ哲學的精神がある。……或時代の内部に於て又は、或人の心の中に於て無秩序に又は敵對的に抗爭しながら現はれ來るところのものは何でも思惟によつて宥和さるべきである。不明瞭なるものは何でも闡明さるべきである。媒介されずに並立して居るものは何でも媒介せられ聯關に置かるべきである。」<sup>1)</sup>かくて經濟學的思惟は自ら經濟哲學的思惟に移り行かざるを得ないのである。

1) G. S. Bd. V. S. 413.

斯くて經濟哲學の課題は諸經濟的智識を聯關付け、根據付け、此が爲の基礎を置くことであるが、總て認識は其認識對象の本質的構造に即して初めて根據付けられ、聯關付けらるゝものなるが故に、此基礎付けに於て最も重要なことは經濟的實在の本質的構造を明にすると云ふことである。而も經濟的實在の本質的構造を明にすると云ふことは經濟的生活域に於ける諸の智識を聯關付け、根據付ける爲の基礎として必要なるのみならず、それ自身に於てもまた、經濟的文化域の哲學としての經濟哲學の重要な課題である。これ經濟的實在に於ける思惟の徹底として哲學的精神は其究極に於て經濟的實在の本質構造自體を認識するに至らなければ止まらないからである。

斯くて經濟的文化域に於ける思惟の徹底としての經濟哲學の課題は、經濟的文化域の本質的構造を明にし、且つ此に基いて經濟諸學を基礎付け根據付け聯關付け、以て經濟的實在を支配する内的な力となることである。

乍然經濟哲學の斯くの如き課題の解決は哲學精神が自己を經濟的文化域の範圍内にのみ局限するところのディルタイの所謂「特殊哲學的學科」die besonderen philosophischen Disziplinenとしての經濟哲學に於て可能であらうか。

ディルタイは特殊哲學的學科なるものについて次の如くに述べて居る。法律哲學、宗教哲學、

藝術哲學と云ふが如き特殊の哲學的科學は藝術又は法律の域を構成する歴史的社會的事態から作り出されねばならぬのであり、其限りに於ては其仕事は特殊諸科學の仕事と一致するのである。而して「斯くの如く特殊の文化域に分離された特殊の哲學的理論は單に現在の狀態の不完全なることより起つたところの一時的のもの ein Provisorisches, aus den Unzulänglichkeit der gegenwärtigen Situation Entspringendes」としてのみ是認するべきものである<sup>1)</sup>。

かくてまた此等のものに於けると同様に特殊の哲學的學科としての經濟哲學なるものは不完全なる過度的なるものなのである。此事は經濟哲學の研究課題を具體的に見ることによつて明にされる。

即ち經濟哲學に於ては經濟原論、經濟史、經濟實踐論の智識が根據付けられ、聯關付けられなければならぬ。此が爲めには此等の智識を成立せしむる態度の仕方の論理的構造が明にせられ、此によつて成り立てる智識を客觀的妥當ならしむべき諸條件が明にせられ、更に此等の論理的構造及諸條件の聯關が明にせられねばならない。而して此等のことは總て經濟學の對象であるところの經濟的文化域の本質的構造を明にし、この本質的構造に基いて初めて爲し得られるのである。また主語を異にする諸經濟學が聯關付けられ、根據付けられなければならぬのであるが、これが爲には此等學の認識が其各の學の主語たる實在の本質的構造に即して爲され、更に此等諸實在の

1) G. S. Bd, V. S. 412.

聯關が歴史的社會的實在の本質的構造の中に於て明にせられなければならない。また相對立せる諸學派を媒介するが爲には此等諸學派の立脚せる方法論的基礎と、更にこの方法論が立脚せる實在本質論とが明にされ、更にこれが媒介されなくてはならぬのである。また經濟的文化域に於ける思惟の徹底としての哲學的精神は思惟自體の本質上よりして單に經濟學内に於ける諸學の聯關付、根據付に止まるを得ず、更に經濟學と他の精神諸科學との聯關付け根據付けを求めるのである。また經濟的文化域の本質的構造は經濟的文化域を一部とする歴史的社會的實在の本質的構造との聯關に於て初めてよく明にされるのである。

斯くの如き經濟哲學の課題は單に經濟的文化域を對象とせる「特殊的哲學的學科」としての經濟哲學に於て解決せらるべきものではなく、諸文化域を其對象とせるデイルタイの「諸文化域の哲學」の立場に於て初めて爲さるべきものである。例へば、經濟原論並に經濟史の確立は「諸文化域の哲學」の第一である實在認識の文化域に關するものに基いて初めて爲され得るのであり、また經濟政策又は實踐論の確立は其第二である價值的文化域に關するもの及び其第三である實踐的文化域に關するものに基いて初めて確立さるべきものである。同様に他の課題も此「諸文化域の哲學」の立場に於て初めて十分に解決し得られるのである。

かくて特殊的哲學的科學としての經濟哲學は「諸文化域の哲學」の立場にまで高まらざるを得な

いのであるが、此立場に於ける經濟哲學なるものは、歴史的社會的實在の本質的構造の中に於て經濟的實在の本質的構造を明にし、此に基き諸精神科學との關聯の中に於て諸經濟學的認識を關付け根據付け、以て諸文化的實在との關聯の中に於て經濟的實在を支配する內的の力とならねばならぬのである。かくてそれは「經濟的文化域を中心とするところの諸文化域の哲學」であると云ふことが出来るであらう。

デイルタイは諸文化域の哲學の課題を彼の最も重要な哲學的使命とせし「Die Grundlegung der Geisteswissenschaften」『精神科學の基礎付』に於て解かんとしたのであるが故に、此立場に於ける經濟哲學を詳にすることは、更に進んで此『精神科學の基礎付』を明し此との關聯に於て爲されねばならぬのである。